初出→「週刊朝日」２００６年９月１日号から２００７年３月16日号まで。
単行本化にあたり、一部を削除し加筆訂正しました。

松谷みよ子
１９２６年東京に生まれる。著書に『龍の子太郎』（国際アンデルセン賞優良賞）「モモちゃんとアカネちゃんの本シリーズ」（全６巻・講談社）『私のアンネ＝フランク』（偕成社）『現代民話考』（立風書房）『あの世からのことづて』『とまり木をください』『小説・捨てていく話』（筑摩書房）『松谷みよ子の本』（全10巻・別巻１・講談社）。近刊に『ミサコの被爆ピアノ』（講談社）。

自伝（じでん） じょうちゃん

二〇〇七年一一月三〇日　第一刷発行

著　者　松谷（まつたに）みよ子（こ）
発行者　矢部万紀子
発行所　朝日新聞社
編集・書籍編集部　販売・出版販売部
〒一〇四―八〇一一　東京都中央区築地五―三―二
☎〇三―三五四五―〇一三一（代表）
振替　〇〇一九〇―〇―一五五四一四
印刷所　凸版印刷

©MATSUTANI, Miyoko　2007　Printed in Japan

ISBN978-4-02-250353-4
定価はカバーに表示してあります

の暮らしにも錦紗を着せたのである。三越で気に入った反物を見つけると母を呼び、毎月、二階正面一番前の席をとって家族で歌舞伎を見た。夏は茅ヶ崎に一軒借りて一夏、子どもたちに海水浴をさせ、正月は熱海で過ごし、父と母はいつも寄りそって散歩し、子どもたちは梅園でラムネを飲み、釣り堀でイカを釣った。

また父は、母の手料理しか食べなかった。外出すると母は車を飛ばしてでも戻ってきて食事の用意をし、家じゅうをぴかぴかに磨きあげた。よく働く人だった。大きな声で笑い「お父様はね、お母様の笑う声が好きなんだって」と言い、くすぐったく私は聞いた。

3　トコトンヤレ

長いあいだ私は、父も母も石川の人と思っていた。そやかてだっちゃかんがやあ、ねまっとりまっし、そうしまっし、やわらかな北陸訛りが我が家では耳馴れてもいた。私たちきょうだいは父と母をお父様、お母様と呼んでいたが、東京風のきっぱりとしたものいいではなく、おとうま、おかあま、と呼んでいたし、姉はおねえま、兄はおにいまだった。これは北陸の呼び方ではなかろうか。

母のもともとの在所が土佐だと知ったのはずいぶんあとで、私の娘時代は戦争のまっただなかだったし、戦後も生きるのに忙しく、母の実家の川村家が土佐だなどと、考えもしなかったのである。



母・松谷翠

なのに、五十歳すぎてから私は突然、私に土佐の血が入っていればいいのになあ、と考えた。何度か土佐に取材の旅をするうちに、血が呼んだのか、ふっとそう思ったのである。すると、それが虫の知らせであったか、母の父・川村友貴が土佐の人で「御維新で天皇が江戸へ遷御されるとき、御輿を警護して出てきたんだって」という話を聞いた。祖父の友貴が行軍のときうたった歌なら私も知っていた。

宮さん宮さんお馬の前に
ひらひらするのはなんじゃいな
トコトンヤレ　トンヤレナ

あれは朝敵征伐せよとの
錦の御旗じゃ知らないか
トコトンヤレ　トンヤレナ

「天皇の輿は同じのが二つあったんだって。影武者が乗っていたんだね、きっと」ところがである。友貴じいさまは江戸までお供をせず、金沢に腰を据え裁判所の書記になったのである。話してくれた従兄弟の川村の貴雄ちゃんによると、友貴じいさまには弟がいて、板垣

退助の自由民権運動に加わって家財をつかい果たし、家は倒産したという。

「明治維新のあと、士族は職もなく困ったんだよね」

と貴雄ちゃんは言う。それで友貴じいさまは江戸行きの行列から抜けて、金沢で就職したのだろうか。

それにしても母方の父祖の地が土佐とは嬉しく、在所は長岡郡本山町助藤（すけとう）で、墓もあると言う。一九八六年（昭和六十一年）、訪ねてみた。墓守りをしてくれている老夫婦もいて、墓は家の裏山をまっすぐ登ったところにあると言う。水の流れた跡のある細い崖道で、雨が降れば滝のように雨水が流れ落ちるのだろう。

這（は）うようによじ登って崖の上にようよう出ると、古めかしい墓があって刻まれた字もさだかではない。近くに屋敷跡もあるとか。

「そのとき聞いたんだけど、土佐・川村の先祖を辿（たど）ると、天皇家に行き着くんですって」

知人に話したら一笑された。

「系図なんてみんなそんなもんです」

同感である。

やがて次兄の民生が昔の戸籍謄本を手に入れてくれた。土佐郡地蔵寺村（現・土佐町）二ノ四六四番地が友貴の本籍だった。

一九八八年（昭和六十三年）次兄の民生とその地を訪れた。四六五番地に川村衆蔵さんという

人がいて田仕事をしていた。

「隣のことはようわからんが、きっと親戚ですろう」

と言う。屋敷があった跡は低い石垣で囲われ水田になっている。青々とした稲田を眺めながら、ここが私のルーツかと思った。山の墓地に墓はあるが墓石はない。さてと、と衆蔵さんは首を傾けた。

それから半年後、母の従姉妹の倉さんから手紙が届いた。九十歳になる倉さんは地蔵寺へ来た私の名を聞くと「それは翠さんの娘じゃろう」と、便りをくれたのである。

突然失礼しますが御免下さい。去年は地蔵寺の私共の墓地へおいで下さいましたさうですのに、御案内も出来ませず、相すまんことでございました。墓地の中央に石碑の無い墓がございます。あれはたしかに、助藤の川村のおばあさんのだと申しておりました。名前は盃（はい）と申したと聞いたこともあります。助藤の川村家は皆お酒が大変好きだったとか、よく話しておりました。

貴女様、松谷翠さんのお子さんではありませんでしょうか。関東大震災の直後、私共、上目黒に一時住んでおりましたので、翠さんも貴武さんもわざわざおいでくださり、お目にかかり、嬉しかったことでした。翠さんがとても美しい方で、そのころは人力車でしたが、それが又よくにあってよけい美しかったこと、なつかしく思い出します。



この手紙を読んだとき、母の膝に抱かれて人力車に乗った幼い日が、まざまざと浮かんだ。娘の私が言うのも可笑しいが、ほんとうに母は美しく、人力車が似合った。ただ、美人といっても瓜実顔の日本風の顔ではなく、眼が二重というより三重四重と深く、鼻はやや鷲鼻でロシア風のがあるが——。

母に抱かれて人力車に乗ったのは、伯父の川村貴武の家を訪ねたときで、あれは戸越であったか、母の楽しみは川村の兄の家を訪れるか、妹光江の家を訪れて、一日ゆっくりすることだった。

さて、九十を過ぎている川村倉さんの便りに心せかされて、高知を訪れた。倉さんは小柄のほっそりした方で、九十過ぎとは思えぬほどしゃんとしていた。話はまず、盃というめったにない名前から、酒好きであった身内に話が及ぶ。

「お米はありますし、大きな桶でどぶろくをつくりまして、みんなで飲んで、この子はだいぶ飲みよるが、ええぞ、ええぞというて、小さいときから子どもにも飲ましよりました」

いやいやこれでは、娘に盃という名を付けるのも無理はない。盃には長女の春、ついで竿という名の娘がある。釣りの好きな父親が付けたという。

春という名はこの一族が好んだのだろうか、父・與二郎の小説の主人公は春夫で、私の兄も春男。姉は朝子。明るいこと楽しいことが好きなのである。言い忘れた。父の小説のもうひとりの

主人公は桜子、『百年後の日本』という題名のユートピア小説で新聞に連載された。秩父・武甲山の風穴で倒れた春夫と桜子が百年後の日本に蘇るのである。父は姉や兄に縁側で小説の筋を語って聞かせたとか。

さて、土佐・川村の盃の娘、春は地蔵寺村へ嫁入りした。助藤には城があって川村がそのあたり一帯を管轄していたが、城勤めのなかでうちには娘がおる、息子がおると話がまとまって、倉さんが言うには、

「母の春が吉野川の支流に沿うて地蔵寺へ嫁入りするとき、まあえらい山の中へ来たもんじゃと心配しよったが、さて来てみれば畑もある、田もある、どうにか食べていけるじゃろうと安心したそうです。それから妹の竿も引っぱってきて、地蔵寺へかたづけて、つぎつぎ親戚の娘を助藤から何人も連れて来まして、あちこち、いいところの嫁にしまして、助藤の勢力のばして、えらそうにしとらしたそうです」

うちの母みたいだと思った。母・翠は東京に嫁入りすると、すぐ妹の光江を呼びよせて、弁護士の瀬尾蔵治と結婚させ、また金沢からつぎつぎ身内の娘を呼んできたようである。えらそうにしとらしたかは、わからない。

倉さんは言う。

「みんな陽気でねえ、楽しく遊びながら暮らしたそうです。見晴らしのええ小高いところに桜を植えまして、春になったら花見ですわ。ときには高知から三味線の師匠さんを雇うて、百姓家一

軒借りましてね、泊まり込みで幾月も稽古しまして、大将がうちの母やら、叔母の竿やらで、娘ども集めましてね、ジャンジャン、ジャンジャン三味線弾いて。

田舎芝居もよう来ました。木造の瓦葺きの小屋がありまして、父がまた芝居に凝りまして、女形になるとそりゃきれいでした。ほんにみんなでよう集まって、高知まで六里、男衆が山越えて走りまして、無塩の魚しょって来よりました。

御馳走精いっぱいこしらえて、遊びました。アユの干したのをおいしく炊きまして、高野豆腐やら水こんにゃくやら……」

勿論、桶いっぱいのどぶろくが据えられていたことだろう。「おしん」という一世を風靡したテレビドラマで、東北の悲惨な生活を知ったのだが、土佐はこんなにも楽しゅうに暮らしていたのか。

この日、日本民話の会の仲間で、現在国立歴史民俗博物館助教授の常光徹さんが同席していたが、倉さんの話のあとで、洩らした。

「いや、松谷さんは十分土佐の女の資格がありますよ」

この言葉は大いに私をよろこばせた。

確かに私には土佐の血があるらしい。庭に〈本と人形の家〉という文庫を建て、人形劇が上演できるようにホリゾントやら緞帳やら蹴込みを揃え、はじめのころは毎月上演した。子どもたちが六、七十人ほどぎっしりつめかける。終わると大鍋にカレーを煮てビールで乾杯する。

そのうち料理上手な文庫のおばさん、森えつさんがローストビーフをつくってくれるようになり、森さんが引っ越ししてからは、なかなかローストビーフとは参らぬが、手づくりの御馳走で乾杯する。

人形劇のほか、語りの会や夕涼みの会、研究会、編集会議と三十余年たった今も、〈本と人形の家〉はにぎやかである。これは師・坪田譲治が、

「松谷さん、自分の力以上の収入ができたら社会に還元しなさい」

と教えてくださったからで、けれど建てたあとは借金返済に追われ、外出したら昼は立食いそばにきめたりしたけれど。

川村倉さんとの出合いには、もうひとつ発見があった。友貴じいさまは実は無類の酒好きで、そのため土佐を出るようになったと言う。

「土佐が恋しかったんでしょう。友貴さんは金沢の酒器をよく送ってくれよりました」

このときの縁で高知の川村千鶴子さんからは暮れに餅などをいただく。私にも故郷があるとの感が深い。衆蔵さんからはガリ版刷りの「地蔵寺便り」が届いた。一九八九年（昭和六十四・平成元年）四月発行の同紙に桜の記事があった。

「今年はお天気続きでずいぶん長く花が楽しめています。ソメイヨシノ、山桜、ヒガン桜、ボタン桜、色にもピンク、白など……」

もしかして地蔵寺へ嫁入りした春さんの植えた桜も、このなかにあるのではなかろうか。